



TITLE:

<批評・紹介>E. O. Lorimer :
Language hunting in the
Karakoram

AUTHOR(S):

石濱, 純太郎

CITATION:

石濱, 純太郎. <批評・紹介>E. O. Lorimer : Language hunting in the
Karakoram. 東洋史研究 1940, 5(2): 161-163

ISSUE DATE:

1940-01-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/145670>

RIGHT:

殿址に於いて發見し得た炕の遺制の如く渤海獨自のも
のがあつて頗る興味を惹くのであるが、この渤海味豊
かな第五宮殿址にて開元通寶ならぬ和同開珎が發見さ
れた事にも我々は彼我の修交に顧み少からず感興を覺
える事である。

以上は調査報告の傳ふる所、特に興味をひいた二三
の主だつた事項をあげたとゞまるが、我々の期待に
そむかず本調査はなほ渤海文化究明に資すべき數々の
基礎的事實を明かにして居る事であつて報告書の傳ふ
る所、なほ語るべき多くのものを存するが、今は割愛
に従ひ、以下に本書の目次をかくげてその内容を推し
ていたゞく事とする。

序説、調査の經過、遺跡（一、外城遺址 二、内城
遺址 三、官殿址 四、寺址 五、自餘の遺址）遺
物（一、瓦磚 二、石獅頭 三、建築金具 四、兵
器 五、陶容器 六、佛像 七、和同開珎 八、雜
具）結論。

本文九〇頁、圖版百二〇、卷末には三葉の地圖（内
渤海國上京龍泉府址全圖、宮城址圖は關東軍陸地測量
部片野彌一郎、黒田一兩氏の作製になる）英文解説及

び本調査以前に踏査したボノソフ氏の報告を添へて居
る。

（昭和十四年三月、東亞考古學會發行、四六四倍判、定價
參拾圓）
〔岡田芳三郎〕

E. O. Lorimer;

Language Hunting in the Karakoram.
London, 1939. pp. 310.

印度の西北地方は、カラコラム連山、ヒンヅクウ
シュ連山、葱嶺連山などの會合地點で世界でも有名な
高山地帯であるが、東洋歴史はこの地帯に、或は北
より南へ、或は西より東へ、或はその反對に、幾多の
足跡を印してゐる。今でも交通困難なるは變らないが
此の地點は英露接壤の重要邊境であるから、複雑怪奇
なる歐洲政局の遷轉はインダス上流地方に何時古代東
洋史に於けるが如き爭奪を廻起しないとも限らない。
希臘王の東征、蒙古土耳古可汗の南下は現代に於ても
必ず此地方へ先づ惹起されてくるに違ひない、時局上
にも注意してゐても興味はある。

然し僕の興味は古代史に懸つてゐる。歴山大王東征

の終點地方であり、法顯玄奘の遊歴行程であり、貴霜族蒙古族の侵入占領の範圍内である事などが、こゝに關心させるのである。かのスタイン卿も數度の中亞に跨がる大旅行の外に西北州の探検を屢々試みてゐる。

その各々の研究報告でなくとも、讀物として書いてゐる。On Alexander's Track to the Indus. Personal Narrative of Explorations on the North-West Frontier of India. London, 1920. を讀んでも、歴山大王は固り、法顯玄奘兩三藏の史蹟が出てくる。又 G. Morgentierne 教授の Report on a Linguistic Mission to Afghanistan. Oslo, 1926. 及 H. Report on a Linguistic Mission to North-Western India. Oslo, 1932. などを見ると、西域記の迦畢試國だの、商彌國だのが研究されてゐたり、パシットオ語と于闐サカ語との關係を論じてはサカ族は貴霜族より早くセイスタン地方迄這入り込んでゐたなどゝ云つてゐる。だから此邊はインド・イラン史の範圍内のものである様であるが、關係する所は廣く東洋古代史に關係する。だから僕には興味が懸つてくる。況んやこのインドとアフガニスタンの接する地方には尙ほトルコ語蒙古語西藏語の飛

地が存在すると云ふから尙更の事である。

本書は此地方の言語風俗を研究し、殊に Burushaski 語に於て大著を完成した D. J. R. Lorimer 中佐の夫人が、夫君に随つてギルギットやアリアバドに滞在した折りの見事なる寫眞が豊富な旅行見聞記である。ロリア氏は元印度軍隊の軍人で印度治政にも關係した人である。ギルギット地方を治めてゐた際に、治政の必要上からでもあるが、同地方に行はれてゐる諸方言を習得して種々資料を蒐集してゐた。中でもブルシャスキ語は學界で所屬や起源が分らず、頗る問題になるものであるから、特に之に意を注いだので、退役して歸國に際しては、尠然たる稿本を抱いてゐたのであつた。英國本土へ歸つて之を悠然と整理してゐた所が、瑞典學界は之を認めて出版させてくれと申込み、斯界の權威モルゲンスチエルネ教授が校字の役に服すと云ふのであつた。かくて出版の方法が立つとロリア中佐は尙ほ此研究を完成せしめんと、再び夫人を同伴して印度に向ひ、歐人の未だ餘りに行かないアリアバドに滞留二年、困苦に堪へ、重病にかゝるの不幸を克服して研究を續けて來たのであつた。この研究より得た

る結果は大著の補遺に現はれると云ふ。夫人は夫君の内助の役ばかりでなく、仕事に對しても勤勉なる助手であつた。言語研究には必須の儀禮風俗の調査については、婦人たるの特權を以てよく土人の家庭に出入して調査をした。本書は夫人がそれらの見聞を記したのである。篇を分つこと三、章を別つこと二十八。第一篇はギルギット時代の概略から再び東行するの緣起を記してある。第二篇は東方への旅行記。第三篇はハンザ地方での生活記録である。こゝで詳細にハンザの生活風俗習慣儀禮などの見聞を記録してゐるので、名助手たるを彷彿せしめるのである。餘事ではあるが、既に彼等歸國の日も近づく頃に、北京を立つて中亞を旅行しつゝあつたビイター・フレミングの蹤跡が不明と

なつて、タイムス新聞の請ひにより之を搜索せんと氣をもむ内に、フレミングがスキイとホツケイの國際選手エラ・マイヤアル嬢と共に異様の風態で颯爽とハンザへ乗込んでくる話があつて、頗る面白い。

本書はこんな著書であるので、別に直接東洋史界に關係ある記事があるのではない。只一夫人が東洋語學者の夫君を助けて生活する記録として少からざる興味があり、且つは中佐が研究調査した印度西北部地方は極東史家にも關心されるべき土地だから、其地方の見聞記もさう打棄てゝ置くべきものでもないだらうかと思つて、瀏覽の餘、この書の出刊を報ずる次第である。〔石濱純太郎〕

(七十頁の北京通信より續く) 檔案類は標本部の方で見ましたが、さう大した數ではありません。或は不注意かとも思ふが圖書部にはなかつたと思ひます。それも亦軍機處關係のものは一つもないと云ふ様なことを聞きました。上海で渡邊君にでも會つたらもうすこしよく聞いて置きませう。猶圖書部には實錄の一部が残つて居ります。これも事變で若干かけた由。今のところ朝天宮にある約三千箱とかのものが問題ですが、元來は二萬とかだつたさうですから碌なものはないのではありますまいか。(下略)。……附記これによると山と積み出された北京の文物もどうやら今は南京にはないらしい。丁度この便りを貰つた一兩日前、故宮の方誕生君から「南遷した故宮の文物は大方日本に渡つたといふ話を聞いたが、眞偽の程を知らないか」と聞かれ「そんなことは萬々あるまい」と言つておいたところで彼此思ひ合せて些さかわびしい。今こそ北京にかへしてはんだたうの利用價值を發揮し得る様な組織も可能な時だと思ふのだが。(一四、一一、一六 今西記)